

出来事ファイル (No.22-4)

■元町商店街でスタンプラリー

元町商店街は自転車乗り入れ禁止地区。自転車の方は押していただくことになっている。

これまでは各丁それぞれ自転車乗入禁止の案内板を制作していたが、このほど全丁統一の乗り入れ禁止案内板を制作、配置した。これを記念、元町商店街では3月12日(土)・13日(日)の両日スタンプラリーを実施、先着百名の方に、記念品として神戸タータン柄のキーホルダーを贈呈した。

元町商店街を
端から端まで歩いて
をもらおう！

MOTOMACHI
スタンプ
ラリー

3.12 SAT
3.13 SUN

11:00-16:00
先着順100名様

START
1.2km
GOAL

神戸タータン柄のキーホルダーを
先着100名様に贈呈します。

神戸タータン柄のキーホルダーを
先着100名様に贈呈します。

■もとまちハーバークリーン作戦

3月2日(水)、もとまちハーバー懇談会では、正午12時から恒例のクリーン作戦を行った。奈良山会長をまじえエスタシオン・デ・神戸チームのほか、ベルコ(株)からはお揃いのジャンパーに身をかためた女性チームも参加、D51広場敷地内を含む神戸駅までの歩道に散乱するゴミなどの収集に汗を流した。



□読者プレゼント

観覧ご希望の方は、展覧会名・住所・氏名・年齢・本紙へのひと言を添え、本紙編集部までハガキでお申込み下さい。先着順で、2名の方にペア招待券をお送りします。

◎「庵野秀明展」

会期：4月16日(土)～6月19日(日)
会場：あべのハルカス美術館
(TEL06-4399-9050)

アニメーター時代に参加した過去の作品や監督、プロデューサーとして活躍する最新の仕事までを網羅し、創作活動の秘密に迫る展覧会です。



東京会場の様子です。大阪会場との展示作品は一致しない場合がございます。提供 庵野秀明展実行委員会

◎特別展「大安寺のすべ

ー天平のみほとけと祈り」
会期：4月23日(土)～6月19日(日)
会場：奈良国立博物館 東・西新館
(TEL050-5542-8600)

1250年の時を経て今も大安寺に伝わる9体の仏像は、奈良時代を代表する本彫群の一つです。かつての伽藍の発掘調査で出土した品々からは往時の壮大な堂塔や華やかな営みの様子をうかがい知ることができます。

重要文化財 伝馬頭観音立像 奈良時代(8世紀)奈良・大安寺後期



◎「鈴木敏夫とジブリ展」

会期：4月23日(土)～6月19日(日)
会場：京都文化博物館
(TEL075-222-0888)

高畑勲・宮崎駿両監督と共に、数々の世界を代表するアニメーション映画を世に送り出してきたスタジオジブリ・プロデューサー鈴木敏夫が「読んできた本」と「その時代背景」に注目した展示会です。



◎「バンクシーって誰?展」

会期：4月23日(土)～6月12日(日)
会場：グランフロント大阪 北館
ナレッジキャピタル イベントラボ
(TEL0570-200-888)

※キョードーインフォメーション
月～土11:00～16:00、日・祝は休み
世界各都市を巡回し人気を博した「ジ・アート・オブ・バンクシー展」の傑作群を日本オリジナルの切り口で紹介する意欲的な展覧会です。

バンクシー(ノラ) Nola (Pea Green & Blue Rain)
2008年 個人展

神戸元町商店街 楽市楽座 情報 4月

◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

- 4月 7日(木)～4月12日(火)
兵庫倶楽部写真会写真展
4月14日(木)～4月19日(火)
第28回いくた15人展
4月21日(木)～4月24日(日)風景を描く
4月28日(木)～5月 3日(火)
元町の芸術家たち展

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

- 4月 2日(土)～4月 8日(金)
『標的』・『発酵する民』・『彼女はひとり』
4月 2日(土)～4月15日(金)『金の糸』
4月 2日(土)～4月22日(金)
特集『そしてキアロスタミはつづく』
4月 9日(土)～4月15日(金)『帆花』
4月 9日(土)～4月22日(金)『デカローグ』
4月16日(土)～4月29日(金)『誰かの花』
4月23日(土)～4月29日(金)
『なん・なんだ』・『SILENT FILM LIVE』
【予定は変更になる場合がございます。】

栄町通クリーン作戦

栄町通まちづくり委員会は、3月11日(金)10時から10時30分まで、栄町通を中心に、ゴミ拾いと不法ビラ撤去、自転車・バイクなどへの不法駐輪警告チラシ取り付け作業など、栄町通クリーン大作戦を実施した。参加者は、(元栄海三丁目協和会)奈良山喬一、(㈱イーエスプランニング)三河晶子、(石倉デザイン)石倉伸吾、(こうべまちづくり会館)木原正剛、(神明倉庫㈱)藤尾憲弘・大西登記子、(神明ロジスティクス)竹本善成、(広島銀行)曾我部真介、(三鈴マシナリー㈱)野田常美、(新光明飾㈱)中川俊・藤田直之・西村友博・大森貴美子、(佐田野不動産㈱)佐田野宏之以上、14名のみなさんでした。毎月第2金曜日午前10時、栄町通6丁目佐田野不動産前集合の上、実施しています。お気軽にご参加ください。

編集後記

貝原益軒が83歳の時に書いた「養生訓」のひとつに「夕食は軽く、朝食はよく」とある。これは朝食よりも夕食を軽く、朝食をよくすることではない。副食はよく食べるのは禁物である。魚や鳥などのように味が濃く、脂肪が多くおもしろいものはわるい。菜類も、山芋、人参、白菜、芋、かいなど、品は、とどこおりやすく、夕食に多くを食べてはいけません。食べなければ、コロナウイルス蔓延防止のため、家に閉じこまざるを得ない私たちへの「思いやり」と受けとめ、納得する。

みなと元町

Town News



発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

きらら広場は広場?それとも道路?再整備イメージ検討中

根津昌彦

タウンニュース2021年10月号で報告した通り、タウン協エリアの拡大に伴い、JR神戸駅とハーバーロードの間にあるエリアでのまちづくり構想を『ハーバーロード・ワーキング』部会で2021年7月より議論を重ねているところである。今号では、同部会が取り上げているテーマである、「きらら広場の有効活用案」「連節バス元町商店街停留所設置候補地」の検討状況について中間報告しよう。



図1 きらら広場の位置



写真1 関西ビルよりきらら広場を望む

ところで、本紙を手にとられた方々は「きらら広場」といって場所を連想することができるだろうか?図1の★印で示した元町商店街の西端、ハーバーロードを渡ったところにある、かつて水の壁のモニュメントがあった場所である(写真1)。昨年10月の第4回ワーキングの場で、神戸市道路管理課よりきらら広場の整備から現在に至る経過を伺ったところ、「え?そんなことだったのか!」という驚きがたくさんあった。

かつてこの場所にD51が設置されていて(昭和53年に設置)、平成3～4年にかけて行われたアーバンリゾートフェアのタイミングでリニューアルされた。D51が現在の場所に移設され、代わりに水泡が美しい水の壁のオブジェが新たな顔として整備されたが、平成7年1月の阪神・淡路大震災のあと停止。稼働しなくなった水の壁の内部には苔が大量に発生し、年間維持費が約400万円かかるなど維持管理の負担も大きかったため、平成14～15年にオブジェの外枠だけを残して、植栽スペースを拡大して再リニューアルしたのが、現在の姿であるとのこと。

数年前からは、都心のレンタサイクルサービス「コベリン」の駐輪基地にもなっている。衝撃の真実は、きらら広場という名称がついた場所であるにもかかわらず、実は道路が変形して島状になった「歩道」であるということ。さらに、タウン協が神戸市との間で元町商店街のアーケード下の道路に関して締結している「道路管理・活用協定」の協定対象となる道路の範囲がこのきらら広場を含んでいるということもわかり、現状でも同協定に沿った活用が可能であるということを知ったのであった。

11月、12月のワーキングでは、きらら広場のあり方や有効活用のための再整備案などについて、意見を出し合い、ワークショップ形式で大きなスケールのきらら広場の図面を広げて、ベンチや植栽などの模型を使いながら施設・機能配置を検討し、再整備イメージ案をつくった(写真2)。



写真2 再整備イメージ案

これまでの検討によって取りまとめた、きらら広場の再整備方針案を以下に示す。
●元町商店街から神戸駅方面へ向かう歩行者やハーバーロード西側歩道を北上する歩行者が、きらら広場を最短距離で通り抜けられる動線を確保する
●きらら広場の南側にある一方通行道路の歩道と車道を入れ替えて、きらら広場を拡張する
●きらら広場の北辺にあたる中央幹線道路

沿いに、連節バスのバス停留所を設ける
●きらら広場の東辺には高木の植栽を、北辺及び南辺には低い植え込みなどを適宜配置して、神戸駅からの歩行者が元町商店街を見通しやすくする
●広場中央にはシンボルとなるモニュメントを設置する
●広場の設えはできる限りフラットなフリースペースを大きく確保し、キッチンカーイベントなどを行う際に、広場内にキッチンカーが4台はレイアウトできるようにする
●イベント対応のための電源を確保する
●コベリンのポートは、元町商店街側、関西ビル横に歩道に移設する
●水の壁のフレームは撤去する
●既存の里程標・サイン、新設のベンチは適宜配置する。

今後は、きらら広場の南東の車道・歩道に面する土地建物所有者の方々にアンケートを行い、きらら広場に対するご意見を伺うほか、もとまちハーバー懇談会やタウン協役員会などにも報告を行って、タウン協拡大エリアのまちづくり構想に盛り込んでいくことを予定している。

昨年のクリスマスに、きらら広場で「モトクロックHappy Holidays Night」というイベントが行われた(写真3)。今後は、神戸元町商店街道路管理・活用協定なども活かしながらイベント利用の実績も重ねつつ、将来の再整備に向けたより具体的な有効活用案の検討を継続していきたい。



写真3 2022年12月24日開催のモトクロックHappy Holidays Nightの様子

海という名の本屋が消えた（101）

平野義昌

元町駅周辺(7) 学校その7

生田神社西側に「啓明女学院」南校舎があったことをご記憶だろうか。中山手通に北校舎があった。1983(昭和58)年須磨区に移転。同校の歴史を遡ると多くの学校が登場する。

プロテスタント・南メソヂスト監督教会の日本伝道は遅く、当時三派あったメソヂスト派のなかでも最後だ。1886(明治19)年、ウォルター・ラッセル・ランバス(1854～1921年)が日本宣教師総理に就任した。父ジェームズ・ウィリアム・ランバスと母メアリー・イザベラ・ランバス(以下、父・母ランバス)は長く中国伝道に献身。ウォルターは上海で生まれ、アメリカで神学と医学を修めた。イギリス留学後、中国で医療伝道に従事していた。同年7月神戸居留地にランバス父母が着任し、9月メソヂスト神戸中央教会(現在の栄光教会)創立。10月同教会で鈴木愿太(げんた)受洗。鈴木は東京英和学校(1874年メソヂスト監督教会宣教師による「女子小学校」が源流、青山学院の前身)出身、上海でランバス父母と行動を共にした。11月ウォルター神戸着、教会内に「読書館」を開く。開館式では外国人宣教師の挨拶、祈禱、聖書朗読他、砂本貞吉が「米国の観衆」と題して講演。砂本は広島出身、アメリカで受洗し、故郷で伝道していた。同年、父ランバスの支援を受け「広島女学会」(現在の広島女学院)を創立。

「読書館」は聖書講義他、討論会、音楽会を開いた。開館してすぐ、アメリカからW・P・バルモア牧師が訪問、毎年100ドルと書物の寄付を申し出た。彼に敬意を表わし、87(明治20)年「バルモア学院」に改称。当初教室が定まらず、教会本部は廃止を決めるが、母ランバスが存続を要請した。8月北長狭通4丁目に教会と宣教師館移転、日曜学校・婦人会を開く。昼間は母ランバスが女性たちに英語と編物、料理を教えた。夜間は男子英語学校「バルモア学院」、ラテン語、スペイン語、物理学、地質学、生理学も教えた。

ウォルターは個人医院に向向いて内科・外科の診療もした。89(明治22)年、原田村(現在灘区)に伝道者養成とキリスト教に基づく青少年教育学校「関西学院」を創立する。

教会本部は母ランバスに女性のための学校を提案し、300ドル援助。88(明治21)年「神戸婦人伝道学校」設立、彼女が校長に就任し、婦人宣教師I・M・ウォースらが教壇に立った。92(明治25)年父ランバスが死去し、母ランバスは一旦帰国。伝道学校は一時閉鎖するが、ウォースが再開。97(明治30)年母ランバス復帰。99(明治32)年、中山手通4丁目に校舎を新設し、「ランバス記念伝道女学校」と改称する。英語を中心に数学、地理、歴史、生理、音楽、編物を教えた。1904(明治37)年「ランバス記念保育所」創立、ランバス母死去。09(明治42)年保育所は「ランバス記念幼稚園」に改称した。補註1

1910(明治43)年、J・S・オックスフォードが「バルモア学院」に赴任。4年制実用英語課程を制定し、タイプ科、速記科、ペン習字科を設けた。タイプライターは古道具屋で購入(70円)した。12(明治45)年院長就任、近隣の子を集めてバイブルクラスを新設する。14(大正3)年、男子校タイプ科に女子が入学(日本人3名、フランス人1名)。21～22(大正10～11)年女子志願者は120名に達したものの、全員を収容できず。23(大正12)年女子100余名を受け入れ、タイプライター20台購入。教会本部は女子部独立と女子商業学校を進言。ちょうど「伝道女学校」が「広島女学校保母師範科」と統合、大阪に移転

して「ランバス女学院」(のち「聖和女子大学」、2009年「関西学院」と合併)となる。中山手通校舎に「バルモア学院女子部」が開校した。C・G・ハランドが初代院長に就任。25(大正14)年「バルモア女子英学院」(Palmore Women's English Institute)と改称。英語科121名、商業科(速記・タイプ)144名、外国人教師・講師4名、日本人4名。28(昭和3)年、教会本部から7万3千円超の献金を受け、校舎を増築。講師として関西学院、神戸女学院、神戸商業大学(神戸大学の前身)の教員が来ていた。註1

初期卒業生の回想がある。入試学力不足者は1年ベビークラス在学のうえ再受験の制度があったこと、卒業論文は英文で教会本部が審査したこと、英語科同期入学40名のうち卒業は9名だったことなどを語っている。註1

戦争の足音が次第に宗教教育を圧迫していく。既に1899(明治32)年の文部省訓令と私立学校令が自由な宗教教育を規制していた。「学校」と認可されれば上級学校への進学資格や徴兵猶予を得られる。信教の自由を選び、青山学院など「各種学校」に留まった学校もある(補註2)。1940(昭和15)年は紀元二六〇〇年に当たる。4月宗教団体法施行、仏教もキリスト教も教派整理統合が進んだ。6月メソヂスト神戸中央教会は「日本基督教団」所属となり、アメリカ本部と断絶。学校への補助金はなくなり、理事9名全員と院長は日本人になり、校名は「バルモア女子英学院」から「啓明女学院」に変更(翌年4月から改称)する。その状況で校章・校歌を制定。前者は英語略称「P・W・E・I」をデザインし、後者はS・W・ヒルバン(関西学院教授)作詞の英文School Songである(補註3)。12月17日付「神戸新聞」は同校を、「特異学園の新体制 ブチ破る外国依存 バルモア英学院が啓明女学院へ」(写真)と報道している。年が明けると、外国人教師・宣教師の帰国が始まり、3月29日ハランドとオックスフォードが神戸港出航。窪田学蔵院長のもと、教師・講師陣は敵国語の非難を受けながら伝統の英語教育を守った。窪田は「バルモア学院」(改称「成蹊学院」のち「大東亜学院」)院長も兼任。

戦中の職員日記から拾う。昭和16年9月出征家族調査。10月銃後奉公強調週間(授業中に武運長久と英霊感謝の黙祷)、全校生徒慰問文・絵画提出、授業中空襲警報、戦勝報道を受け皇居遙拜・君が代。昭和17年3月陸軍記念日(海ゆかば・君が代)、連隊司令部に慰問袋12個届ける、4月神戸に初空襲(1機、焼夷弾3発)、校庭にて町内会防空演習。昭和18年1月暖房石炭なし、2月大詔奉戴日(戦争完遂のための国民運動)院長訓話。同年3月12日をもって日記空白。註1

戦中、県から学校法人化を認められず、1943(昭和18)年、窪田は「明美高等女学校」(日本基督教団東部教会)の飛田昌久校長に学院存続協力を依頼し、合併。戦後、飛田が院長になり学院財団設立、高等女学校認可、新制中学校・高等学校開設となる。49(昭和24)年学校法人認可。同年ハランド元院長が再来日し「啓明」を訪問後、63(昭和38)年まで長崎県と青森県の系列校で教壇に立った。

さて「啓明」南校舎のこと。戦後のベビーブームにより入学者が急増する。1958(昭和33)年中学1年入学28名のところ、59(昭和34)年は75名、60(昭和35)年には211名、中・高在学者は創立以来最多の943名になった。同年アメリカ本部から献金を得て、下山手通2丁目に土地

を取得。ここは前回紹介した「幼きイエズス修道会」の外国人学校「聖マリア女学校(エコール・セント・マリー)」(54年閉校)があった場所。歓楽街の間近に聖なる女学校が復活した。

夜間「バルモア学院」のこと。戦前期卒業できたのは入学者の3%と言われる。戦中も勤労青年のための英語教育を貫き、中国語・マレー語も教えた(註2)。戦後、受講者が増加、4年制の専門学校になった。アメリカ本部が外国人教師の給料を負担し、他校より授業料は安かった。1960年代には年間2500人の生徒が在学、卒業者は1割程度とやはり難関。80年代から英会話学校増加・競合で生徒減少。90年代には外国人教師帰国、授業料値上げなど、経営が悪化。2007(平成19)年に中央区相生町に移転。2020(令和2)年12月、居留地以来の英語教育の場を閉じた。註3

元町学校巡りの最後に、戦後の新制中学校について。1947(昭和22)年諏訪山小学校内に「神戸市立生田中学校」が開校。翌年北長狭通4丁目(旧長狭小跡地)に「長狭中学校」分離、校庭は細長く狭く、テニスコートとバレーボールコート各2面がやっとだった。「生田中」は山手小学校に移転した後、51(昭和26)年中山手通7丁目の新校舎に移る。同年「長狭中」は校名変更して「神戸中学校」。定時制「市立兵庫高等学校」が同居していた(現在「市立摩耶兵庫高等学校」中央区東川崎町)。90(平成2)年に「生田中」「神戸中」は統合し、現在の「神戸生田中学校」となった。

註1 『Sixty Years of Memories』啓明女学院60年誌編集委員会編 同女学院発行 1983年
註2 黒澤一晃「戦時下の英語教育 神戸での一体験」https://www.jstage.jst.go.jp/article/hisetjournal/1986/14/0/14_15/_pdf
註3 「朝日新聞」2020.12.22夕刊写真 「神戸新聞」1940年12月17日
補註1 日野原重明聖路加国際病院名誉院長(1911～2017年)は同園卒。父・善輔は神戸メソヂスト中央教会牧師。
補註2 青山学院は文部省と交渉を重ね、特典回復に努力した。Web「AOYAMAGAKUIN PLUS+」https://aogakuplus.jp/story/20200529_01/
補註3「学院史」は「学院草創期のバルモア女子英学院の伝統と精神を象徴」(上掲註1)と誇る。
参考文献
●『神戸と聖書 神戸・阪神間の450年の歩み』(同編集委員会編 神戸新聞総合出版センター 2001年)
●吉野丈夫「神戸と基督教」(神戸伝道100年史刊行会 1975年)
●『神戸市立中学校創立40周年記念誌』(神戸市教育委員会・市立中学校校長会 1987年)
●『定時制教育 神戸市立高等学校校定時制教育30年記念誌』(神戸市教育委員会・同定時制教育振興会 1978年)
引用文は適宜新字・新かなに直した。



みなとMIO MACH ケンチクさんぽ vol.9

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部

兵庫地域会 地域まちづくり委員会

酒とおとんと建築と

老舗のBARでひとり飲んでいると過去と繋がる瞬間がある。みなと元町はそういった場所が数多く点在し、今も意識の中で時間を遡ることができる。仕事終わりにお酒を飲みながら、みなと元町の空気を感じて建築について考える、それが日課となっている。

時にBARで、時に居酒屋で、時に焼肉店で。入り組んだ路地を散歩するようにお店からお店に移動する。そうしていると自ずとこの界限で営むお店の連携が見えてくるのである。それは非常に結束が強く、お互いにこの町を支え合っているように感じ、とても心強くもこの界限から逃れられない魅力のようなものを感じるに至る。そこで出会うお客さんのほとんどは常連さんで、いろんなお話を聞かせてくれたり、付近のお店の話で盛り上がったりする。そういった濃い出会いもこの場所ならではのものだろう。

私が生まれる以前、今の私よりも若年であった父親もこの辺りでお酒を楽しんでい

た。その当時に行きつけていた焼鳥店が世代を超えて今も営業している。そのお店に足を踏み入れると、時間を遡って父親がカウンターでお酒を酌み交わしている姿を感じるのである。その時代にこのお店を家族で切り盛りしていた娘さんと話をしたくて通っていたのだと聞いたことがあるからだ。喋る口実を作るために瓶ビールを何本も注文したのだろうか？それともひとり静かに飲んでいたのだろうか？今は自分よりもお歳を召されているその娘さんが気になったりする。

これは、もう50年ほど昔の話であるが、他にも現在も営業されているお店はたくさんある。とあるBARで3代目として営業されている方、ある寿司屋では私よりも年上でここで生まれてお店をされている方たちなど、いろんなお話を聞いては、父親が過ごしたこの町の想像を補強するのである。今、若かりし頃の父親と出会ったとしたら、今の私がどのような会話をするの



旧チャーリーブラウンにて

人の意識による建築の存在

古くからある建物、モニュメント、そういったものの方が遥かに質の高い情景を生むことができる。その物を写真や本で知るより、あの場所には昔外国人のパブがあったとか、今の南京町広場の場所でドラム缶に火を焚いて暖を取りながらお酒を飲んでいたなどと聞く方が、頭の中での想像力を無限に膨らませることができる。歴史を繋ぐ上で建築が現存する必要はなく、それを利用した人の心に残ることができれば、その建築はこの場所に意味を成したものであると言えるだろう。そうやって、人の思い出や感情により、後世の想像に引き継がれていく。

そして、そこには文献では決して得ることのできない建築の本質の姿があるのだと思う。古くから残る建築もあれば、新しい建築も違和感なく共生する。そこには、様々な人によるドラマがあり、それらが新旧問わず建築を繋ぐ動脈となっているのである。

そしてその強く繋がれた建築群が新たな人の想像を生み、繰り返し繰り返し歴史を足していけるのは、この町の適度な規模によるものなのだと考える。

広く大きすぎる町では意識まで繋ぐことはできない。三宮の繁華街と適度に離れ、線路と海に挟まれた多様性を持つ環境ながらも凝縮さ

らるうか？今と同じく付近の行きつけのお店の話で盛り上がるのだろうか？意気投合して、何軒もお店を梯子するのだろうか？それとも意見が合わず口論するのだろうか？お酒を愛する父親を疎ましいと思った未成年期もあったのだが、歳を重ね蓋を開けてみると、私も同じくこの場所で楽しんでいる。ただひとつ違うことは建築士としてこの町で過ごしているということである。だから人との会話に散りばめられた情報から過去の情景を鮮明に頭に浮かべることができる。いろんな情報を蓄積し、情景を整えながら、日々飲んでいる。この場所には目に見える以上に素敵な建築が存在している。私にとっては、目を瞑ればいろんな建築が見える。それは人が形作った建築、いろんな人々の目線からの建築である。もちろんそう思えた一番強い感覚はおとんの目線なのである。

さて、今日もこれを書き終えて、みなと元町に建築を見に行こう。

高宮 透 (たかみや とおる)
株式会社グランデザイン一級建築士事務所
代表取締役／一級建築士/兵庫県建築士会所属
スペイン・バルセロナにて建築を学び
日本十西洋の新たな建築を創造する